
僕と彼女とあたしと彼

さすらいのかえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女とあたしと彼

【ZPDF】

Z0359C

【作者名】

さすらいのかえる

【あらすじ】

僕の初恋の相手は年上だった。告白するつもりは無かったのだけど・・・。彼は突然好きだとあたしに言った。あたしが初恋ってありえない・・・。（長編ですが1話完結方式です。あと視点が1話ごとに変わります）。

「僕は好きですよ」

彼女が珍しく、自分の事を卑下するような言葉を言ったので、つい言つ予定の無かった言葉が僕の口から漏れた。

「なに？ 同情？」

「一応、本気ですけど」

「いちおう？」

「すみませんね。こういう気持ちは初めてなもので」

「それってあたしが初恋って事」

「そうですが」

「ふうん。初恋って実らないものだよね」

「そんな事も言いますね……」

「これはふられたって事かな？」

自分でも良くわからないが、特にショックを受けなかつた。
「え、自分の事卑下する言葉は言わない方が良いですよ」

「なんで？」

「言葉には力が有るので、本当の事になりますから」「でも、あたしは自分の事嫌い」

彼女の目を見て僕が言つ。

「僕が生まれてきから、たぶん何百人か会った女人で、初めて好きになつた人なんですよ。もう少し自信持つて下さい」

「……」

「彼女が田をそらしつつぽそつと言つ。

「そつか」

「そうです」

「あのせ、あたしのビゴが良いわけ？」

「……わ、わからないです」

「あっそ」

「本気ですよ」

彼女が急に近づいてくる。僕の目の前に顔が……ち、近い。
僕が戸惑っていると、胸にそっと手を置かれた。
ふつと笑つて彼女が言つ。

「大丈夫？」

大丈夫なはずがない、この人は何をしているんだー!?
顔が熱い、確実に顔が赤くなっている事だろう。
そして、彼女が何かを堪えるよう僕から離れると……。
「つくれ、あはは」

なぜか爆笑された。

「……」

笑い終えると彼女が言つた。

「あゝ笑つた、笑つた」

「酷いですね」

「ん」と、お礼になんか一つだけお願ひ聞いてあげる
「お礼? 別に何もしてないんですけど」
「いいから、何か無いの!!」
「じゃあ、手を繋いで下さい」
「は?」

「ダメですかね?」

「そんなんで良いの」

「良いです」

彼女が手を差し出す。僕はそっと手を繋いだ。

「その嬉しそうな笑顔は反則

「え?」

「なんか趣味が変わりそう」

「……」

その2

「いいかげん離れてよ」

「い、嫌です」

何であたしはこんな子と一緒に居るんだろう？

突然好きと言われるまで全く彼の気持ちには気付かなかった。言われた後も彼の態度は何も変わらないし……。

でも、さつきから急に態度が変わつて、あたしにしがみついている。

ピカリと窓から光が差す。そしてすぐに轟音が部屋の中に響いた。
「今のは結構近かつたね」

「で、ですね」

「あのせ」

「なんですか」

必死な顔をしているので笑いそうになる。そんなに怖いのか。
「何笑つてんですか！」

「あ～悪い」

彼につつこまれた顔に出てたらしい。

「こ」の前は近づいたら心臓が凄い事になつてたけど、今は平氣なの
？」

あたしは、この前の事を思い出して、また笑いそうになる。

「あ～うん……あ、今わかつたかも」

ふわりと笑つて彼が言った。

「え？」

「好きなとこです」

「……」

「そやつて強がつてる所が好きなかも」

彼の言葉にビックリした。そして、少し力が抜けた。

「……」

「僕はあなたを少しでも助けたいです」

「何言つてんだか」

「ん~こんな格好だと説得力無いですかね……」

あ、また光った。そして少し遅れて音が鳴る。さつきより遠くなつたようだ。

「あたしこの音苦手なんだ」

「僕もですよ」

「でも、こうすれば平氣かも」

あたしはそつと彼に抱きついた。彼がビックリして逃げようとする。

「あ、逃げるな」

ぴたりと彼の動きが止まる。彼の心臓の鼓動を感じた。

また笑いそうになる、何であたしなんかにそんなにドキドキしてるのがな?

そう、そして、何であたしはこんなにドキドキしているんだろう? 同じように鳴っている心臓の音は彼に届いただろ? うか……。

「ぼくたちって付き合ってるんですかね？」

「あ～どうだうね」

何となく勢いで、僕は彼女に自分の気持ちを伝えたのだけど、彼女の態度は特に変わらなかつた。

でも、つい最近、どういう理由なのか彼女から抱きついてきた時があつた……頭が真っ白になつて記憶があやふやなのに、彼女の心臓の音だけはハッキリ覚えている。

僕たちが変わった事といえば、仕事が終わつた後に、一緒に食事するようになつた事だけかな。

食後に何となく疑問を口に出したら、合間な返事が返つてきた。

「そうですよね」

「今まはじやダメ？」

彼女が不安そうに言つた……ビックリした。

彼女は人に弱い所を見せるのを嫌う人だつたから。

「ダメじやないですが」

「が？」

「良くわからないですよね」

「……」

「人を好きになるのが初めてだから」

「あ～そうだつたつけ」

「うん。だから、今幸せですよ」

「は？」

「あなたは僕の気持ちを拒絶しなかつたし」

「でも、受け入れ「わかつてますよ」」

彼女が苦しそうに言つから、僕は遮つて言葉を言つてしまつた。

「そう」

「絶対嫌いになりませんから」

「なにそれ？」

「なんでしょうね。何か言つてしましました」

「そう」

「どれくらいかわかりませんが、今の感じでいきましょう」

「ありがとう」

「今日は素直ですね」

「今日は？」

「ん～そうですね。最近、僕の前だと素直ですね」

少し照れたように顔を伏せた彼女を愛おしく感じた。

彼の言葉に凄く動搖してしまった。怖かった。

彼との関係を何かの形にしてしまったらい、壊れてしまふんじゃな
いかつて……。

彼の真っ直ぐな気持ちを受け止める自信が無い、強がっているあ
たしが好きなんだと言られて、少しだけほつとしたけど、あたしの幻
想を好きなんじゃないかと、どうしても思つてしまふ、彼はあたし
の事をちゃんと見ているのかな……。

だつてさ初恋があたしつてありえない！！

あたしの不安を感じたように彼が言つ。

「絶対嫌いになりませんから」

好きだと言われるより、何だか嬉しかつた。

「はあ～」

「どうかしました？」

「きみの鈍さに呆れたの

「そうですか……」

ただたんに私が怖がつてゐるだけで、周りから見たら付き合つてゐ
よう見えてると思う。

そして、君の前だと、力抜けてますよ。動搖したり、不安になつ
たりしてるのは、あたしの方だよ。

何でこんなに弱気になつてるんだる、あたしらしくないな、そう
思うとつい自分に対して苦笑してしまつ。

彼があたしの表情の変化に気付いたのか話しかけてきた。

「どうかしました？」

「どうもしてない」

「ならないんですけど」

「あのさ、前から気になつてたんだけど、仕事以外は敬語じゃなく
ても良いよ

「癖です。何か抜けなくて……」

「まあ、無理にとは言わないよ」

「直す方向でいきます」

いや……直す方向にこいつてないよそれ！！ 口に出したら、こいつ

までもこの話題になつてしまいそうだし、心の中でツツコム。

あたしが黙つた事で、急に2人の空間が静かになつた。でも、沈黙が苦にならない。

どちらからとはいわず、そつと手を繋ぐで、あたしたちは、暫く何も喋らず過ごした。

ただただ、ずっとこうしていたいと思つた。

その5（前書き）

その4に続き、彼女視点です。

「はあ～」「あたしは勢いよくため息を吐いた。
「疲れますね」
「あ～うん……何で嬉しそうなの？」
「え？」
「あたしが疲れてると嬉しいの？」
イライラをぶつけるように言つてしまつた。でも、彼はさうりと受け流すよつに言つ。
「良くわからないけど、普段無理して元気出してんじゃないからって、何となく思つんですね」
「それで？」
「だから、僕の前だと無理してない感じがして嬉しいのかも」
「そつか」
彼がおもむろに私の手を握る。
「何してんの？」
「気を送つてます」
「あつそ」
「元気でしたか？」
「ん～きみの方が元気になつた気がする」
「た、確かに……」
「だよね。嬉しそうだもの……。」
「どうかした？」
彼が少しまじめな顔になつて、なにやら考へている。
「……好きですよ」
「え？」
何突然言つてるかな？」のナは……。
「今日はもう言こません」

「う、うん」

あたしが彼の言葉に戸惑つていると、突然抱きしめられた。そして、優しく頭を撫でられる。体の力が自然と抜けた。うわ～やばい。

あ～ほんと、彼の言動と行動が予想つかない、まあ、良い意味で予想を裏切るのだけど……。

「元気分けてみました」

につこり笑つて彼がそう言つと、あたしから離れようとする。あたしが咄嗟に言つ。

「足りない！」

「え！　じゃあもう少し」とうじてますか？」

あたしは、返事の代わりに力を抜いて体を預けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0359c/>

僕と彼女とあたしと彼

2010年10月8日15時47分発行